

## 75年を祝して（その2、牟岐町）



美波病院 本 田 壮 一

1947（昭和22）年12月に社団法人となった海部郡医師会は、2022年に75周年の節目を迎える。前号（海陽町）に続き、牟岐町やその医療機関の現状を紹介する（写真は22年3月6日に撮影）。

平成の市町村合併では、隣的那賀郡の様に海部郡全体や、旧の牟岐・日和佐・由岐の3町が合併する美海町<sup>みうみ</sup>の構想があった。けれども、郡内では牟岐町は単独のままとなった。海陽町と美波町の間にあり、南は太平洋に面し、八坂八浜の名勝がある<sup>1)</sup>。沖合には、牟岐大島や連絡船が運航されている人の住む手羽島がある（図1）。人口は3,807人（22年3月）。1942年に開業した牟岐駅は、阿波室戸シーサイドラインが愛称のJR牟岐線の終着駅であった。現在は、阿波海南駅まで伸びている。



図1：内妻海岸から手羽島を望む

徳島県立海部病院（浦岡秀行院長、110床。図2<sup>2)</sup>）は、2017年5月に高台に新築移転し、「地域に寄り添い愛される病院」をめざしている（海拔16m、免震構造の6階建て）。常勤医は、内科5名（徳島大学の地域枠や自治医科大学卒の若手医師など）、整形外科4名、脳外科1名に過ぎず、徳島大学の寄附講座（総合診療医学分野や地域産

婦人科診療部・地域脳神経外科診療部）や同大学病院、徳島県立中央病院・徳島赤十字病院などからの支援医師が多数勤務し、専門外来を担当している。



図2：県立海部病院

人手不足の中でも、「海部・那賀モデル」として、海南病院や上那賀病院・美波病院・手羽島診療所の外来支援を行っている。現在は、地域包括ケア病床（4階52床）を休止し、COVID-19の入院診療を行い頭が下がる。そのため、一般病床の不足があり、美波病院などがバックアップしている。

屋上に二つのヘリポートを備え、DMATが2チーム。災害医療拠点病院に指定されており、津波災害時に活躍が期待される。広報誌が、海部郡3町（約1.8万人）や高知県東洋町の各世帯に配られており、受け入れ患者は広範である。休止しているが、「地域医療研究センター」が院内にあり、地域医療教育への活用が期待されている。また、旧県立海部病院は改装され、COVID-19患者の宿泊療養施設として利用されている。

同町中村には、3つの医院がある。1) 竹林眼科（竹林優先生。図3 a）：手術も行っており、

## 会員随想

ご尊父の貢先生は、元郡医師会長。県立海部病院院長も歴任され「地域医療の充実及び学校保健活動に貢献した功労者」として、2020年に日本医師会最高優功賞を受賞された。2) 小柴医院牟岐駅前クリニック (小柴邦彦先生。図3 b)；継承され、循環器診療だけでなく、COVID-19サポー

ト医としても活躍されている。3) 玉真病院牟岐診療所(堤健先生。図3 c)：週3回の血液透析を主に、玉真病院(阿南市)の関連施設として運営されている。川長の美海クリニック(東晃生先生。図3 d)：併設の和楽(介護老人保健施設)の診療とともに外来診療を行っている。



図3：a. 竹林眼科、b. 小柴医院牟岐駅前クリニック、c. 玉真病院牟岐診療所、d. 美海クリニック

結びに、2008年に県立海部病院の応援団として組織された「地域医療を守る会」は、海部郡一円の医療機関の支援に拡大。コンビニ受診を控える寸劇や、美波病院にもクリスマスやバレンタインにスイーツをいただき感謝している(図4)。牟岐町には、釣りやダイビング・サーフィンのスポット<sup>1)</sup>があり、会員は住民に加え観光客の急病にも取り組んでいる(広報担当委員)。

### 【参考URL】

1) 「四国の右下」

⇒<https://shikokunomigishita.jp>

2) 徳島県立海部病院

⇒<https://tph.pref.tokushima.lg.jp/kaifu>



図4：井ノ口崇先生(徳島大学)と(美波病院)